釧路新聞
発行所 釧路新聞社
釧路市黒金町7の3
©釧路新聞社 1992

市立釧路病院

地方センター病院に指定

釧根地域の中核施設に

市立釧路総合病院（濱野哲男院長）が十三日、道から道内三番目の地方センター病院の指定を受けた。これにより同病院は釧路、根室圏域内で専門医師の派遣や技術援助を行い、中核施設としての機能を果たす。医療過疎が続く釧根地域の住民にとっては、救急医療面でも効果が期待できそうだ。

濱野院長

救急医療グンと充実

地方センター病院は、第三次保健医療圏（全道六圏域）で五百床以上のベッド数を有し、内科、精神科、外科、小児科、脳神経外科などの総合病院が対象となり、がんなどの悪性新生物、小児疾患、難病などに対する治療施設や血液、生化学、病理、脳、呼吸の循環機能検査などの機能をもつことが必要とされている。また医療活動の分野では、圏域内の地域センター病院（市町村立病院など）に医師を派遣したり技術援助、要請に応じて医師の派遣も必要となる。さらに臨床検修医による臨床教育を通したプライマリ・ケア（一次医療）を担う医師の養成や大学や地域センター病院との情報交換や進歩して臨床研究も行う。

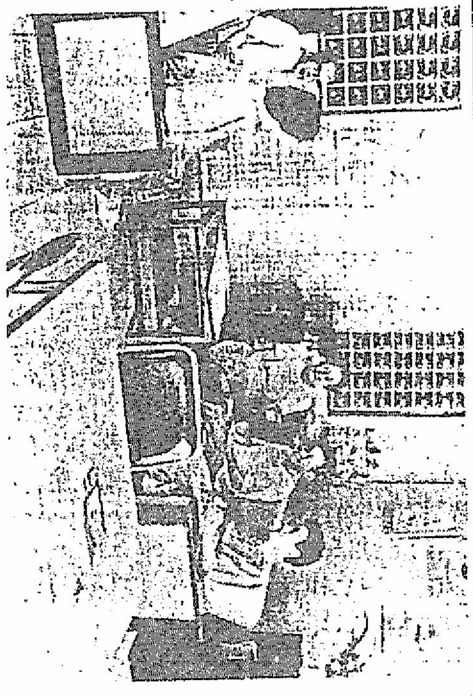
指定に伴う補助制度としては施設整備（病棟、診療棟）や研修棟の建設に対しては三分の一から三分の二、医療機器、研修事業、医師派遣に対しても三分の二から三分の一の補助制度がある。

今回の指定は帯広厚生病院（昭和五十四年度）、北見赤十字総合病院（平成三年度）指定につぎ三番目となり、釧根地域救急医療や技術面での向上にも効果を上げるものと期待されている。

釧根地域の中核医療施設としてセンター病院指定を受けた市立病院

「子供に負担をかけたくない」というような理由で、有料老人ホームに入居する人が増えています。特に関心が高いのは、食事や介護などのケアをセールス・ポイントにした高齢者用ケア付きマンション。その実態はどうなのか、人々の関心はどんなところにあるのかなどを、商品科学研究所の高橋と横浜の「ライフ・キッチン・コア」が、共同で調査研究を行いました。

ケア付きマンションの実態



入居者全体で話し合ったり、交流することも大切です

満足度は高いが 食事に不満

五十五歳から七十五歳までの男女三百八十八人へのアンケートによると、元気なうちは、子供がいる人でも74%が夫婦だけの暮らしを考えています。しかし、介護が必要になった場合、男性の半数近くが「妻に頼りたい」と思っていますが、女性は「民間・公的介護施設」を希望している人が三〇%もいます。

全国の七十五のケア付きマンションの入居案内調査によると、入居時に必要なお金は一千万円から一億円近くまでさまざまですが、大部分は三千万円～五千万円（四十平方メートルに一人入居程度）でした。毎月の経費は、一人十万円～十三万円が中心。医療・介護サービスでは、施設内で診療ができるのは三十九施設、提携医院だけがあるのが二十二施設、どちらもないのが六施設、記載なしが八施設でした。

実際に入居している十三施設十五人へのインタビューによると、今の生活が大変気に入っている人が三〇%、まあまあ気に入っている人が六三%。不満の多くは食事サービスにありました。夕食が四時四十分から六時と早過ぎたり、食堂の開いている時間が短いとか、メニューが選べないなどです。

介護に関しては、まだ実際にその立場の人が少ないので、ケア内容を良く知らないというのが実態でした。

こうした調査結果をふまえて「ライフ・キッチン・コア」では、次のような提案を行っています。生活者に対しては次の通りです。

元気なうちに居住者として入居し、積極的にとけ込むようにすること。施設に対する自分の希望を明確にし、それに合った所を選ぶようにすること。必ず何カ所かは体験入居してみること。それも一週間くらい宿泊して、食事を三食とも食べてみることが必要です。複数の入居者に意見を聞いたり、細かい部分まで確認しておくことも欠かせません。

経営主体は全国有料老人ホーム協会加入で、医療機関が参画していることが安心。居室は二部屋以上で収納スペースが広く、自炊もできるシステムが最適です。